□佐藤正己博士 Dr. Masami Sato 1910-1984

本誌元編集員茨城大学名誉教授佐藤正己博士は本年 8 月30日に逝去された。10年以上のパーキンソン病との闘病の末に，不幸にも肺炎を併発したのである。哀悼にたえない。君は山形県東田川郡櫛引村の名家の生まれで，御両親とも教育家であり，父上は後に上京して統計学者として鉄道省の要職につかれる傍ら郷土出身学生のための寮 庄内館の経営に尽された方である。元町小学校，府立四中，水戸高校を経て，君は昭和 9 年 3 月東京帝国大学理学部植物学科を卒業，すぐに大学院生，同13年 4 月副手の後同年11月助手に任ぜられた。君は水戸高校の野原茂六教授の薫陶を受けて早くから陰花植物に興味を持ったが，大学中期学生の時にすでに地衣類に関する報文を発表している。大学院時代の前後にはクリプトガーメン会なるゼミを私的に組織し，後進と共に陰花植物を学んだ。中井猛之進教授が一時陰花植物の分類学を担当されたことがあるので，助手としての君にはその方面の充実が期待されたものと思われる。太平洋戦争に入って昭和19年 3 月陸軍技師（司政官）に任ぜられ，同年 9 月ボゴール植物園勤務を命ぜられた。戦後一時東大助手に復職したが，昭和22年山形県立農林専門学校教授となり，これを国立大学とするために力を尽し，同25年山形大学農学部教授となった。同29年には茨城大学文理学部の教授に転じ，同51年 4 月停年退職したが，なお求められて同学の非常勤講師を 3 年間勤めた。この間，両大学を通じて多くの後進を養成し，また大学内外の多岐にわたる役職をこなした。君は生来整理能力にすぐれ，快活で万事要領がよく世話好きであり，その人柄からわれわれ大学の同級生との交友も円滑であった。文章は平易流暢で，専門とした地衣類に関する論文のほかに多くの随筆，紀行文を残した。

朝比奈泰彦先生が本誌の編集主幹となられた第 9 巻（昭和 8 年）第 1 号以来，君は編集兼発行者木村雄四郎博士（津村研究所）を助けて，論文の蒐集，校正の実務のほとんど全部を昭和19年まで独力で処理した。この功績は長く記憶されている。

静子夫人とは昭和12年に結婚し，2 男 2 女があり，みな幸福に暮しておられる。

（津山　尚　Takasi Tuyama）

□佐藤正己先生の地衣学への貢献　Contributions to the lichenology by Dr. Masami Sato

佐藤正己先生は旧制水戸高校在学中からすでに地衣類に興味をもち，東京帝国大学理学部で植物学を専攻されたあとも，一貫して地衣類の研究に従事された。地衣類探索調査の足跡は日本の各地を始め，樺太，台湾，北支・山西省，さらに戦後はニュージーランドに及んでいる。この間，数々の地衣学上の新知見を発表されたが，なかでも中井・本田監修になる「大日本植物誌」に収められた「地衣類 ウメノキゴケ目（I）」(1939) 及び「地衣類 ハナゴケ目（I）」(1941) は特筆すべきものである。前者ではアンチゴケ科 Anziaceae Sato の新設を，後者ではキゴケ属（*Stereocaulon*）のなかに Sect.